

## 大齋節第三主日（3月4日の聖書箇所）

### I 第一朗読（出エジプト記20章1―17節）

- 1 神はこれらすべての言葉を告げられた。
- 2 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。
- 3 あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない。
- 4 あなたはいかなる像も造つてはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものも造つてはならない。5 あなたはそれらに向かつてひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、6 わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。
- 7 あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおかれぬ。
- 8 安息日を心に留め、これを聖別せよ。9 六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、10 七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。11 六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。

12 あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることが出来る。

13 殺してはならない。

14 姦淫してはならない。

15 盗んではならない。

16 隣人に関して偽証してはならない。

17 隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。」

### II 第二朗読（ローマの信徒への手紙7章13―25節）

13 それでは、善いものがわたしにとって死をもたらすものとなったのだろうか。決してそうではない。実は、罪がその正体を現すために、善いものを通してわたしに死をもたらしたのです。このようにして、罪は限りなく邪悪なものであることが、掟を通して示されたのです。14 わたしたちは、律法が霊的なものであると知っています。しかし、わたしは肉の人であり、罪に売り渡されています。15 わたしは、自分のしていることが分かりません。自分が望むことは実行せず、かえって憎んでいることをするからです。16 もし、望まないことを行っているとすれば、律法を善いものとして認めているわけになります。17 そして、そういうことを行っているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。18 わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。19 わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。20 もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしてるのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。21 それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまとっているという法則に気づきます。22 「内なる人」としては神の律法を喜んでいますが、23 わたしの五体にはもう一つの法則があつて心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。24 わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。25 わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えています。

Ⅲ福音 (ヨハネ2章13―22節)

13 ユダヤ人の過越祭が近づいたので、イエスはエルサレムへ上って行かれた。14 そして、神殿の境内で牛や羊や鳩を売っている者たちと、座って両替をしている者たちを御覧になった。15 イエスは縄で鞭を作り、羊や牛をすべて境内から追い出し、両替人の金をまき散らし、その台を倒し、16 鳩を売る者たちに言われた。「このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」17 弟子たちは、「あなたの家を思う熱意がわたしを食い尽くす」と書いてあるのを思い出した。18 ユダヤ人たちはイエスに、「あなたは、こんなことをするからには、どんなしをしをわたしたちに見せるつもりか」と言った。19 イエスは答えて言われた。「この神殿を壊してみよ。三日で建て直してみせる。」20 それでユダヤ人たちは、「この神殿は建てるのに四十六年もかかったのに、あなたは三日で建て直すのか」と言った。21 イエスの言われる神殿とは、御自分の体のことだったのである。22 イエスが死者の中から復活されたとき、弟子たちは、イエスがこう言われたのを思い出し、聖書とイエスの語られた言葉とを信じた。

(23 イエスは過越祭の間エルサレムにおられたが、そのなさったしるしを見て、多くの人がイエスの名を信じた。24 しかし、イエス御自身は彼らを信用されなかった。それは、すべての人のことを知っておられ、25 人間についてだからでも証ししてもらう必要がなかったからである。イエスは、何が人間の心の中にあるかをよく知っておられたのである。)

今週の福音の文脈

ヨハネ1―18は福音書全体の序文(プロローグ)なので、福音書本文は19―51節の段落から始まる。この段落はさらに四つの小段落に分けることができ、主人公が洗礼者ヨハネからイエスへと移り変わる様子が、実に巧みに表現されている。

続く21―12では、カナでの婚礼の席で行われたイエスの最初のしるしが述べられる。ぶどう酒の豊かさは信じる者の救いとなる「終わりの日」の象徴でもあり、それによってイエスの栄光が現され、弟子たちは信仰へと導かれる(11節)。

今週の福音(213―22)のテーマはエルサレム神殿の「宮清め」であり、イエスの死と復活を表すしるしとなっている。

続く31―36では、ファリサイ派のニコデモとの対話が述べられている。この対話は「宮清め」の後にエルサレムで行われている。ヨハネは対話を中断させ、16―21節にヨハネに特徴的な福音理解を説明として挿入している。それによると、神はその独り子を与えたほどに、世を愛したのであり、それは独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためだ、とされている。最後の31―36節もヨハネによる解説である。こうしてイエスはエルサレムを離れ、ガリラヤに戻ってゆく(四1―3)。

今週の朗読の構成とその解説

13 そして 近かった 逾越祭が ユダヤ人たちの、  
そして 上った エルサレムへと イエスは。

a

14 そして 彼は見つけた 神殿で  
売っている者たちを 牛や羊や鳩を  
そして 両替屋たちを 座っているのを。  
15 そして 造って 鞭を ひもから  
すべてを 彼は追い出した 神殿から 羊も牛も、  
そして 小銭の両替屋たちの硬貨を 彼は散らした  
そして 机を 彼はひっくり返した。  
16 そして 鳩を売っている者たちに 彼は言った、  
「取りのけなさい これらを ここから。  
するな 私の父の家を 商売の家に。」  
17 思い起こした 彼の弟子たちは 次のことを  
書かれて あった、

b

18 「熱心は あなたの家への 食べ尽くすだろう 私を。」  
それで答えた ユダヤ人たちは  
そして 彼らは言った 彼に、  
「どんな しるしを あなたは示す 私たちに、  
なぜなら これらを あなたがおこなう？」  
19 答えた イエスは  
そして 彼は語った 彼らに  
「解体しなさい この神殿を  
そして 三日のうちに 私は起こすだろう それを。」  
20 それで言った ユダヤ人たちは、  
「四十と六年で 建てられた この神殿は。  
そして あなたは 三日のうちに 起こすだろう それを？」  
21 だが彼は 言った 彼の体の神殿について。  
22 それで死者から彼が起こされたとき、  
思い起こした 彼の弟子たちは それを彼が語ったことを、  
そして 彼らは信じた 聖書を  
そして 言葉を ところの イエスが語った。

b'

23 さて 彼がいたときに エルサレムに 逾越祭に 祭りに、  
多くの者が 信じた 彼の名前を、  
見て 彼のしるしを ところの 彼が行なった。  
24 だがイエス自身は 信じなかった 彼を 彼らに  
故に 彼がすべてを知ることの、  
25 そして なぜなら 必要を持たなかった  
ようにと ある人が 証す 人間について。  
なぜなら彼は 知っていた 何があったかを 人間のうちに。

a'

①【全体の構成】

【aメシアの待望(13節)】 傍線をつけた「過越祭」と「エルサレム」は最後の段落(23―25節)にも登場する。「過越祭」も「エルサレム」もユダヤ人を一つにまとめる象徴であり、メシア待望と関係している。

【b神殿での出来事(14―17節)】 17節で「書かれた」と訳した語は22節で「聖書」と訳された語と同じ語根である。二重線を付けた「思い起こした」と「書かれて」は次の段落(18―22節)にも登場する。この段落では神殿でのイエスの行動が描かれている。

【cユダヤ人との論争(18―22節)】 この段落ではユダヤ人(神殿を管理する人たち)との論争が述べられている。19・22節「起こす(エゲイロー)」が、建物を「建てる」の意味で使うのは、ここだけである。これはイエスの復活を表す言葉でもあるので、ここでは両方が意味されているだろう。

【dしるしを求める信仰(23―25節)】 この段落では23節「信じる」と24節「信じなかった」の対比がテーマとなっている。24節の「信じなかった」は「信じてゆだねなかった」の意味であろう。

ユダヤ人はメシアを待望するが、彼らの神殿は「商売の家」となっている。イエスは神殿を三日のうちに「起こす」が、ユダヤ人はそれを認めたくはない。イエスのしるしを見て信じた者は、その生き方をイエスに「ゆだねる」必要がある。

②【構成から使信へ】

今日の福音は、イエスがエルサレムの神殿からいけにえの動物や商人を追い出した出来事を描く。子の行動は突飛とも思えるが、イエスがその生涯をかけて成し遂げる贖いの業と深く関わっている。

メシアの待望(13節)

過越祭は、エジプトにおける奴隷からの解放を記念する祭りだが、同時に、将来メシアがもたらす救いを待望する祭りでもあった。またエルサレムは、終末においてすべての民が巡礼に訪れる聖なる都と考えられており、救済への希望を象徴する町であった。13節では、「過越」と「エルサレム」という言葉によって、民を救うメシアへの待望が暗示されている。

神殿での出来事(14―17節)

イエスは神殿に入ると、犠牲のための牛や羊を追い出し、商売人を追放する。イエスには、神殿での商売が耐えがたい墮落と映ったのかもしれない。しかし16節の「私の父の家を商売の家にするな」というイエスの言葉の背後には、ゼカ一四21「その日には、万軍の主の神殿にはもはや商人はいなくなる」が響いている。イエスの行動には、救いが完成する「その日」の到来を告げ知らせる象徴的な意味があったのである。

イエスが追い出した動物は共観福音書では「鳩」だけが、ヨハネはさらに「羊」と「牛」を加えている。神殿が商売の家でなくなるためには、いけにえとしてささげる羊や牛をもちや必要とほしくない状態が来なければならぬ。イエスは自らいけにえの羊として死ぬことによって、いけにえの動物を不必要にしたのである。ヨハネはイエスの死を、過越祭でいけにえの羊が屠られる時刻に起こった出来事として描くが(一九14)、それは、イエスがすべてのいけにえに代わったことを示すためである。

17節の「思い起こした」は、22節に弟子たちはイエスが死者の中から復活した時に「思い起こした」とあるのと同様に、神殿での出来事が起こったその時ではなく、イエスの復活の後、聖書を手がかりに「思い起こした」ということである。だから、17節の、イエスを「食い尽くす」は十字架に死ぬことを意味している。

#### ユダヤ人との論争 (18―22節)

イエスのこの行動に腹を立てたユダヤ人たちは、いったい何の権威があつて乱暴を働くのか、その「しるし」を見せよと迫る。イエスが示すしるしは、神殿を三日で「起こす」ことである。この「神殿」とは21節の説明のようにキリストの体を指す。イエスが示した「しるし」は彼の受難と復活であつたが、20節が示すように、ユダヤ人はそれを理解できない。しかし、イエスは誤解を解こうとはせず、むしろそれを背負い、この「しるし」を成就するために十字架にまつしぐらに向かう。

#### しるしを求める信仰 (23―25節)

23節では、13節同様、「エルサレム」と「過越祭」という言葉によつて、救済への希望が暗示される。救いを求める人々は、イエスの行つた「しるし」を見て「信じた」。しかしイエスは、彼らを「信じなかつた」。それはイエスを信じるなら、自分の生き方をイエスに「ゆだねる」はずだからである。奇跡を求める信仰はイエスに「ゆだねる」信仰になるとは限らない。イエスが彼らを「信じてゆだねなかつた」のは、彼らがイエスを「信じてゆだねなかつた」からである。

#### ③今週の福音のまとめ

イエスが神殿から商人を追い出すのは、神殿に対する熱意というよりは、17節に書かれているように、神への熱意からである。神殿は神の住まいであるが、容易に人間の欲望の住まいに変わり得る。しかし、イエスはそのような「神殿」を建て直すために、十字架に上つて、いけにえの小羊となる。救いを成就させる力は、人を救おうとする意志を揺らぐことなく持ち続ける神と、それに参与して死に至るまで従順に歩むイエスとから来る。

#### ④今週の福音の言葉から

##### 神殿 (ヒエロン)

「神聖な・聖別された」を意味する形容詞ヒエロスから派生した名詞で、「祭儀や礼拝が行われる聖域・聖所」を意味する。新約聖書では、異邦人の神殿「エフェソのアルテミス神殿」を表す用例もあるが(使一九27)、ほとんどのユダヤ人の聖域「エルサレム神殿」を表す。神殿を表す別の名詞にはナーオスもあるが(19・20節)、ナーオスは「聖域の内部に建てられた建築物」を表すのに対して、ヒエロンは「建物や庭や門などを含む神殿の境内全体」を表す。新約聖書には71回の用例があり、1コリ九13を除けば、用例は福音書と使徒言行録に限られる。

まず、神殿は「聖なる場所」であり(使二二28)、律法と並んでユダヤ人の宗教生活の中心である。神殿ではユダヤ教の祭司たちが働き(マタ二二5)、その警護のために「神殿守衛長」が働き(ルカ二二52)、神殿でユダヤ人は祈る(ルカ一八10)。イエスが生まれると両親は律法の規定に従つて、いけにえを献げるため神殿に行く(ルカ二27)。アンナは神殿を離れず、断食して祈る(二37)。初代教会のキリスト者も神殿に参拝する(使二46)。ペトロとヨハネも祈るために神殿に行く(使三一)。使徒たちは神殿で宣教し(使五20以下)、パウロも神殿で祈り(二二17)、供え物を献げる(二二26、二四18)。

福音書の用例では、イエスにまつわる出来事に関係して使われることが多い。一二歳のイエスは、神殿で学者たちに交じつて問答を行う(ルカ二46)。悪魔は神殿の屋根の端にイエスを連れていき、飛び降りるよう誘惑する(マタ四5と並行記事)。また、神殿はイエスが宣教を行う場所である(マタ二二23、マコ二二35、ルカ二〇1、ヨハ七14・28など)。共観福音書でイエスは神殿の崩壊を予告する(マタ二四1と並行記事)。昇天したイエスを見た弟子たちは神殿で神を賛美する(ルカ二四53)。

今週の福音には、いけにえの動物を売る商人や両替商が登場するが、彼らが店を開いていた場所、神殿境内(ヒエロン)の中でも「異邦人の庭」と呼ばれる区域である。動物が売られて

いたのは遠くから参拝する巡礼者の便宜のためであり、また両替商が店を開いていたのは神殿に納めるお金は市中で使われていたローマ貨幣であつてはならず、古いユダヤの貨幣が使われたからである。

しるし(セーメイオン)

ある人物や事物を他から判別するための「しるし・特徴」が基本的な意味。ごく普通には「目印・合図・特徴」の意味で使われる。飼い葉桶は誕生したメシアの目印である(ルカ二12)。パウロが記す挨拶は、手紙がパウロの手で書かれた「しるし」となり(2テサ三17)、ユダの接吻はイエスを逮捕するための「合図」となる(マタ二六48)。パウロにとつて、アブラハムの割礼は、割礼以前にアブラハムが信仰によって義とされたしるしである(ロマ四11)。弟子たちは終末の時を見分けるしるしをイエスに尋ねる(マタ二四3と並行記事)。終末のしるしは人の子の再臨である(マタ二四30)。

次に宗教的な用法として、この語は「自然の成り行きに反する不思議な出来事・不思議な業・奇跡」を表す。この意味での「しるし」は、悪魔やその使い(2テサ二9、黙一三13)、また偽メシアや偽預言者が行う奇跡を表すこともあるが(マタ二四24、マコ一三22)、ほとんどは「神に源を発する不思議な業・奇跡」を表す(マタ一六1、マコ八11)。この場合、「しるし」を行うのは神であり(使二19)、イエスであるが(ルカ二三8)、弟子たち(マコ一六20)、信じる者(マコ一六17)、使徒(使二43)、モーセ(使七36)、パウロたちも、神に属する人として、しるしを行う(2コリ二12b)。

ヨハネ福音書には17回の用例があり、そのすべては「不思議な業・奇跡」を意味する。しかもヨハネ福音書では、他の文書と違い、しるしを行うのはただイエスに限られており、この語はイエスの独自性を表している。

イエスはしるしを行つて自分の栄光を表す(ヨハ二11)。また、しるしにより、イエスは闇を取り除き(九16)、復活と永遠の命を与える(四54)。しるしは神がイエスと共にいること(三2)、イエスが罪のない人間であること(九16)、洗礼者ヨハネの証言が真実であったこと(十41)、イエスが終末の救いを人々に運ぶ者であることなどを表している(六14、七31、一一18)。だから、しるしは単なる不思議な業ではなく、イエスが誰であるかを示す出来事である。しるしを見て信仰は生まれるが(四48)、しるしとイエスを切り離し、しるしがもたらす賜物だけに目を向けるのは間違っている(六26)。